

新潮文庫

藤村詩稿

(早春)
前篇

島崎藤村著



新潮社

稿 詩 村 藤
篇 前 一 春 早

定價100圓



庫 文 潮 新

昭和三十年三月三十日發行
昭和三十九年七月三十日十八刷

著 者 島 崎 藤 村

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐 藤 亮 一

發 行 所 東京都新宿區矢來町七一
株式會社 新 潮 社
電話東京二六〇局一〇一一(大代)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

新 潮 文 庫

藤 村 詩 稿

(早 春)

前 篇

島 崎 藤 村 著



新 潮 社 版

805

目次

早春記念	六
仙臺雜詩	九
姉の家にて	一二
淺間の麓	一四九
貝割葉	二〇九
年表	二二〇

早

春

前
篇
(藤村詩稿)

早春記念

遂に新しき詩歌の時は來りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。傳説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壯大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき。されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる。誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。

生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。

いさゝかなる活動に勵まされて、われも身と心とを救ひしなり。

藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

右、仙臺と木曾福島と小諸とで書いた四巻の詩集を台本とし、明治三十七年九月初めて藤村詩集と題して世に公にした時の序。身も若く、詩もまた若かつた頃の記念としてこゝに載せることゝする。

わたしの詩を讀んで見て呉れる人達のためには春陽文庫に藤村詩集があり、岩波文庫に藤村詩抄があるから、こゝにはそれらの年若い頃に書いた詩稿のうちの主要なものゝみを選び、仙臺雜詩、姉の家にて、及び淺間の麓として、そのところぐに種々な思ひ出など書きつけて見る。この定本（定本版・藤村文庫）を手にとつて見て呉れる讀者諸君には、わたしの詩稿製作の順序もおほよそ明かになるであらう。

昨年九月、『夜明け前』第二部を脱稿して見ると、わたしもかなり遠く歩きつゞけて來た

といふ氣がする。人生羈旅の峠の上とでもいふべきところに身を置き得たやうな氣もしてゐる。この定本を編むのを機會に、若かつた日の方へ思ひを馳せ、いさゝかたりとも自分等の表現したいと思ふことに言葉を賦與することの出來た時と場所とを辿つて見ることは、それによつて自己を反省するたよりも成らうと考へる。六十餘年のこの世の思ひ出、殊に自分の交つた友、讀んだ本、その他周圍にあるものから學んだことのあらましを書きつけて見るのも、あながち無駄なわざではなからうと思ふ。

仙臺雜詩

流星

門にたち出でたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてて
何かこひしき人の世に
流れて落つる星一つ

右、仙臺で作った詩稿のうちの最も早いものゝ一つ。自分のたどくしい出發は、こんな地上の愛ともいふべきものからであつた。この外にも、晝の夢、かもめ、新泉、桜の音、小田原海濱に遊ぶ、友のうへを悼む等の詩を同時に自分等の同人雑誌『文學界』誌上に發表したが、最初の詩集『若菜集』の中には入れなかつたものもある。

仙臺へ赴く前、東京に緒方流水君といふ知人があつて、この人は竹越三又氏の主宰した雑誌『世

界之日本』の編輯にたづさはつてゐた。左の詩は緒方君の紹介で同誌上に載せて貰つたやうに覺えてゐる。舊い詩稿の一つである。

君と遊ばむ

君と遊ばむ夏の夜の
青葉の蔭の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
晝の愁ひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
樂みのかす夜は盡きじ

夢かうつゝか天の川
星に假寝の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
梭の遠音を聞かめやも

わたしが東北學院の教師として仙臺に赴いたのは明治二十九年であつた。時に二十五歳。この仙臺行はかねて相識の間柄であつた明治女學校の小此木忠七郎君が斡旋によるので、わたしの受持は作文科と英語科の一部とであつたが、職員仲間としても最年少者の一人であつた。學院の同僚で畫學の教師をしてゐた布施淡君はわたしの旅の身に同情を寄せられて、舊い屋敷町の方にあつた同君の住居の一室をわたしに貸して呉れた。やがてこの布施君と共に廣瀬川の畔に一軒の新しい貸家を見つけ、一時そちらの方に移り住んだこともある。そこは眺めのある位置にあつて、わたしが先づ詩作をはじめたのもその河畔の家であつた。東京本郷森川町の方に残して置いて來た母が危篤の報に接したのもその年の秋のことであつた。亡き母については書きしるして見たいと思ふことも多いが、こゝには盡しがたい。たゞそのために仙臺から東京へと急ぎ、更に名古屋廻りで郷里なる惠那山の麓まで行き、父が墓の側に母の遺骨を納めて來たことだけにとゞめる。仙臺へ引き返してから、わたしは布施君の許を辭し、名掛町に旅人宿と下宿とを兼ねた三浦屋といふ家へ移つた。以下の仙臺雜詩は皆その名掛町の宿で出來た。

春

早

秋 思

秋は來ぬ

秋は來ぬ

一葉は花は露ありて
 風の來て弾く琴の音に
 青き葡萄は紫の
 自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ

秋は來ぬ

おくれさきだつ秋草も
 みな夕霜のおきどころ
 笑ひの酒を悲みの
 盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ

秋は來ぬ

くさきも紅葉するものを
 たれかは秋に酔はざらむ
 智恵あり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはん

哀歌

中野逍遙をいたむ

「秀才香骨幾人憐、秋入長安夢惘然、琴臺舊譜壚前柳、風流銷盡二千年」、これ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。文科大學の異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の餘唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を寫せしもの、「寄語殘月休長嘆、我輩亦是艷生涯」併せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首

中野逍遙

思君我心傷

思君我容瘁

中夜坐松蔭

露華多似淚

思君我心悄

思君我腸裂

昨夜涕淚流

今朝盡成血

示君錦字詩
忽覺筆端香

寄君鴻文冊
窗外梅花白

爲君調綺羅
中有鴛鴦圖

爲君築金屋
長春夢百祿

贈君名香篋
休將秋扇掩

應記韓壽恩
明月照眉痕

贈君雙臂環
一鐫不乖約

寶玉價千金
一題勿變心

訪君過臺下
佇門不敢入

清宵琴響搖
恐亂月前調

千里轡金鶯

春風吹綠野